

『資本論』 第一部、第四篇、第十一章 協業

- 資本主義的生産の出発点(歴史的・概念的)…かなり多数の労働者が、同じときに、同じ^空時間^間で、同じ種類の商品の生産のために、同じ資本家の指揮のもとで働くこと(S. 341)
- 資本主義以前の生産様式との相違…さしあたり量的なもの。剰余価値率や労働力の搾取度には変化なし。価値生産…別々に生産しても、いっしょになって生産しても、相違なし
- ・多数の労働者の束…個人差は相殺され、平均的労働力が見出される。総労働日÷労働者数=社会的平均労働の一日分 ※資本家→労働日は総労働日として存在。労働者→労働日は総労働日の可除部分として存在
 - ・労働の熟練度の一定の最低限を確保、しかし、最低限が平均とは違っていても労働力の平均価値を支払わなければならない→剰余価値率の相違。価値増殖の一般法則…資本家として、社会的平均労働を動かすようになったときに、完全実現
- 労働過程における生産手段の一部分の共用…その価値は規模や有用性に比例しては増大しない。生産物や生産過程に入り込む生産手段の価値は相対的に小さくなる→商品価値の低下。多くの人々による生産手段の共用→社会的労働の条件としての性格を得る(労働過程が社会的性格を得るよりも先に)
- ✓ ●生産手段の節約→①商品を安くし、労働力の価値を低下させる。②利潤率を変化させる。労働者には何の関係もない一つの特殊な操作としての②のみを考慮 (S.344). 疑問点
- 同じか或いは関連のある生産過程で、多くの人々が計画的にいっしょに協力して労働すること=協業(S. 344)
- ・個別労働者の力の機械的な合計≠結合労働(協業による、集団力としての生産力の創造)
 - ・社会的接触による競争心や活力→個別的作業能力↑(ばらばらで或いは一人でやるよりも多く生産) ※「人間は生来、(…)社会的な動物」だから(S. 346) ★疑問点1
建物の同時着工は、人数よりいかに、命と区別される協業は何か?
- 共同労働の最も単純な形態(=互いに補い合う多くの人々が同じことかまたは同種のことをすること)は協業の最も発達した形態にあっても一つの大きな役割を果たす(S. 347)
- 協業…①労働の作用範囲を拡張、②生産領域の空間的縮小(←労働者の密集、労働過程の

近接、生産手段の集中)

●結合労働の独自の生産力…労働の社会的生産力または社会的労働の生産力←協業: この中では、労働者は個体的限界を脱して種族能力を発揮

●協業する労働者数、協業の規模←①可変資本について: 資本家が労働力の買入れに投ずることのできる資本の大きさの程度による、②不変資本について: 個々の資本家の手のなかにかかなり大量の生産手段が集積されているかどうか

●・最小限度の大きさの資本…「資本関係創出のため」→「社会的労働過程への転化のため」

・労働に対する資本の指揮…「労働者を資本家のために働かせるため」→「労働過程そのものの遂行のため」

●・指揮・監督・媒介の機能…資本に従属する労働が協業的になれば、資本の機能になる
・指揮の機能の独自性: ①社会的労働過程の搾取の機能(←階級対立)、②大規模化した生産手段を適当に使用させる、③労働者を資本家のために働かせようとする意志(←資本の作用としての協業)

●・資本家の指揮←①社会的な労働過程たる生産過程、②価値増殖過程たる生産過程。協業が大規模化するにつれて、労働者に監督させる(ただし、資本の名の下に)

・「産業の指揮者だから資本家」なのではなく「資本家だから産業の指揮者」なのである

●資本家…独立した労働力の価値を支払う。結合労働力の対価を支払うのではない。→資本が協業させるかどうかの采配を振るう→労働者が社会的労働者として発揮する生産力=資本の生産力

●・狩猟民族や農村共同体における協業(←生産条件の共有、個人の未確立): 自由な賃金労働者を前提とした資本主義的協業とは違う

・協業の資本主義的形態は、農民経営や独立手工業経営に対立して発展する。ただし、協業の特別な歴史的な一形態としてではなく、協業そのものが、資本主義的生産過程を独自のものとして区別するための、この生産過程に特有な歴史的形態として、現れる←労働過程の資本への従属←比較的多数の賃金労働者の同時的使用

協業とその歴史的形態。関連は、ほろい。い。

●資本主義的生産様式…労働過程が一つの社会的過程に転化するための歴史的必然。労働過程の社会的形態→生産力増大→いっそうの搾取 **★疑問点 2**

「資本主義」

5.342 + 23a + 最後: